



2003年(平成15年)
2月号(No. 693)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-info@jac.or.jp

日本山岳会考

会報『山』に携わって考えたこと

村井 葵

■前会報編集人として

会報の編集人の仕事から解放されて東大阪で暮らしています。在任中、多くの会員にお世話になり助けられました。実は編集人という肩書きは表向きに過ぎず、実務の割り付けや編集の厄介な仕事は同僚の奈良原町子に任せっきりでした。僕のやったことは2、3号先の巻頭原稿を依頼すること、ゲラ刷りの校正を2回ほど集中してやることでした。紙面を借りてそのことを告白し彼女に感謝して

おきたい気持ちです。

神経を使ったつもりでも何回かの失敗がありました。ご迷惑をかけた方々にお詫びしておきます。

■私の現在の山登り

現在、暇を見つけては家から取り付ける生駒山に登っています。南北30⁺ほどの小さな山ですが、神仏の雑居ビルのような歴史の深い山です。同じ道を二度と通らない主義で登っていますが、まだ僕にとって未知のルートが残っており、好奇心がつのる日々です。神

目 次

日本山岳会考	1
報告	4
図書委員会・妻坂峠越え/AG C山岳地理クラブ・三宝山と 三河川の源流を訪ねて	
Climbing & Medicine	18
支部だより	6
秋田/京都/石川	
東西南北	8
短歌・アンナプルナをめぐる /ふたつの特別企画展/「石 の塔」への不思議紀行/富士 山頂で健康診断	
海外の山	10
図書紹介	11
『世界の山』『回想の谷川岳』 『記録 若き日の山』	
図書受入報告・新入会員	12
会務報告	13
ルーム日誌	14
INFORMATION	15

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

武天皇の東征神話の舞台で、戦時中の国威発揚のための巨大な碑も山奥に建っています。その頃、大阪の街は海の底で荒波がヒタヒタと山腹を洗っていたと『古事記』にはあります。消え入りそうな古代の修験道も3本見つけ、通うたびに新しい発見があります。

昔、ヒマラヤの8000⁺峰を目指したときは、マラソンで標高500⁺ほどの暗峠(くらたけ)を越えて大和にかけ下り、竜田川沿いに法隆寺まで20⁺ほど走ったこともあり、暗峠は芭蕉も死ぬ直前に越えています。大阪側は緑の屏風を立てかけたような急斜面で、片肺の今の僕には歩くだけで激しく息が切れます。それがまたいいのです。より深く自然を認識できるからです。強さを意識していた頃の狭い視野

■山の楽しみ百人百様

伝統ある貴重な紙面を借りてなぜ、こんな個人的なことを書き始めたのか、それには訳があります。会報をのぞくと縁あつて入会した中高年の退会者が多いことが気になるのです。心を動かさなければ何ことも始まりません。山の愉しみ方は百人百様、無限にあります。



ローツェ・シャル

心を動かしていただくヒントとして一例を示したかったのです。山岳会にはさまざまな委員会や同好会があります。門をたたいて各自の愉しみの核をつかみとっていただいたいと思います。図書室はいうまでもなく、山好きな人にとって山岳会は汲めども尽きぬ宝宝箱のようなものです。僕が紹介した友人のひとり上手いのか下手なのかよくわかりませんが、絵画に目覚めてスケッチクラブで楽しんでいます。絵はさておき仲間との

交流や旅がいいようです。

■九死に一生を得て

前年の総会の席上で「東京支部再設立」についてなぜ意見を取り上げて会報に載せなかったのかという質問を受けたことがあります。申し訳ないが、僕の頭には全く記憶がありませんでした。咄嗟に「何度かの山登りで高度障害にかかって」と言い訳をしたところ爆笑を買ったことをよく覚えています。実は僕は28歳のときに不覚に

も高所で意識を失くし、1か月寝たきりでした。放っておけば安楽死でしたが、かけがいのない仲間たちが僕を日本に連れ戻してくれました。九死に一生を得たものの目は見えず、歩けず、ただ限りなく眠い。この状態では50歳まで生きられまいと覚悟を決めました。ところが人の体は不思議なもので、バネのようなホメオスタシスが働いて徐々に悪いなりに体が安定してきました。人生観も大いに変わりました。再び6000m峰くらいなら逆療法かたがた登れるようになりました。しかもごく快適に。ただし肺をやられてからの今はダメです。

若い会員諸君に言いたいのです。人生はそれほど長くない。その中でも最盛期はほんの一瞬に過ぎない。チャンス逃さずベスト・クライミングをやってほしい。人には必ずダメになる時がくるということです。

高度障害で僕の左脳は萎縮したままです。僕特有の記憶の欠落はどうやらこのへんに原因があるようです。山で縮めた命を今は山で取り戻す作業をしているところです。僕にとって山は永遠

の学び舎です。梵我一如を目指したいと思っています。

門外漢としてはまことに申し訳ない提案ですが、HAT・Jなどがエヴェレストの清掃活動をやっています。これは過去のたれ流しの責任上、山岳会が中心になって組織的に効率良く行うのが美しい姿と思えます。富士山の清掃活動についても右に同じです。

■あるがままに100周年

1月7日、編集人から電話があり、「100周年に向けてのJACのあり方」について書けという慌ただしい原稿依頼がありました。これについては「山」9月号の日本山岳会員の「ふたつの26歳——日本山岳会は100年たった今何をめざすのか」と、12月号の大蔵喜福会員の「これからの山岳会一考——存続と活性化のために」という見識ある論考に共感する点が多々あります。

不真面目だとお叱りを受けるかもしれませんが、深刻にならずに自然の流れにまかせる、という樂觀論が僕の考えです。深刻にものごとを考えるますます血液の流れが滞り、視野が狭くなり、体が

硬直します。そういう閉塞状態は避けたいと思います。時至れば否応なしに破壊と創造の神、シバ神が現れて対応してくれるはずですよだと思えます。100周年だからといって焦ることはない。あるがままになるようにするとした上で肅々と100周年を祝えばいいと思います。

■若年層対策について

唯一、次世代を継ぐ若者がいないというのは大きな問題です。これは何とか手を打たねばなりません。青年部の松原尚之理事が中心になって待望の『きりぎりす』を発刊してくれ、若者の核ができてつあります。松原君自身、山岳会創立の頃でいえば、大年増に入ります。せっかくの『きりぎりす』が外に向かつて有効に活用されているか否かも心配です。月刊誌の『山』も外部の若いジェネレーションに向け有効に活用するのいいと思います。大蔵会員の若者を軸にした一連のマッキンリー登山も見逃してはいけない貴重な事業のひとつではあります。

抜本的な案として上高地の山研

を利用して会員の子や孫を集めて山での冒険の楽しさを教えたらどうかという議論をしたことがありました。いずれにせよ全国各支部でも若者対策は頭の痛い問題でしょうから、この辺で腰を据えてアイデアを出し合い対策を練った方がいいがでしょうか。

中村保会員が『JAPANESE ALPINE NEWS』を発刊したことはまさに敬服です。山岳会の最も弱い部分に光が当たり、国際的な交流が深まり、海外の登山界からも好評を得ていることは喜ばしいことです。また『チベットのアルプス』と題して膨大な探検踏査記録をまとめ『山岳』に掲載されています。未踏峰の美しいカラー写真や詳細な地図もあり、これが好奇心旺盛な若者たちの目に止まったらどんなにいいだろうと考えます。61歳前後のほとんどの会員には無用と思うにつけ残念でなりません。

■混成チームの高所登山

山岳会の看板のひとつ、高所登山にも少し触れてみたいと思います。僕の理事任期中にカンチェンジュンガで事故が起こり、2人の

前途有望な青年が命を落としました。最大の痛恨事でした。冒険は自己責任の世界だから誰にも責任を押し付けるわけにはいかないでしょう。しかしこれを切実かつ貴重な教訓として事故回避の戦術を真剣に考えねばなりません。僕は混成のチーム登山を怪しみ、疑っています。生体と大自然の波動が共鳴するように調和を心がけなければならぬ重要な局面で、どうしても邪心や雑念が入り込んでしまうからです。これはひとつには僕も含めた旧態然とし、固定観念化した山岳会の古い体質に一因があるように思います。体に染み付いた古い習慣はなかなか抜けきらず、若者を引きつけるエネルギーになっていないのかもしれない。エネルギーはあっても若者との波長が合わないとも思えます。

■理想の高所登山とは

1978年、メスナーがハーベラーとともに無酸素でエヴェレストに登ったとき、日本的な組織登山は幕を降ろしたと大方の人は認めているはずですが、それ以前の目を見張る一連のメスナーの描いた高峰への軌跡は識者の知るところ

であり、その後、仕上げにエヴェレストを北側からソロで登っています。僕はメスナーを超人とは思わないし、思いたくもない。僕らと同じ血が通った人間です。古くはナイロン装備のない時代に背広姿でナーゲルを履いてシプトンやロングスタッフもヒマラヤの高峰でシンプルなアルプスの登山を試みています。

究極的な理想のクライミングはベースキャンプにテント・キパー(連絡員)を置いてソロで登ることだと僕は思っています。雑音がなく、集中力を高められるからです。自らの判断で行動できるので最も安全で自由な山登りができる。ソロでなければ気心の知れた2人か、多くても3人どまりの編成が理想だと思います。もちろん、これには条件があり、心身が高所に調和するように研ぎ澄まされていなければなりません。世界の趨勢をみると高峰登山はこのあたりまで進化し、冒険の質が変化しています。アナログがデジタルに進化するように世の中は動き続けています。いずれ僕自身のためにも別途改めて高所登山の総括を試みたいと思っています。

報告

REPORT
2月日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

図書委員会

第9回「古道を歩く」
妻坂峠越え

埼玉県秩父郡横瀬町と人間郡名栗村を結ぶ往還にある妻坂峠。この峠越えは第3回の催しで平成8



雪の峠越え

年6月8日、青葉の時に越えたものを季節を変えて実施した。

12月15日、秩父地方には低温注意報が出る冷え込んだ朝、西武秩父駅に集まった16名の参加者の中に、遠く越後湯沢から新幹線で参加された2人の女性があった。

登山口まではマイクロバスを利用した。道は生川^{うぶがわ}に沿い、武甲山の表参道との分岐点までで、雪の中に降り立った。9日に東京にも降った雪が秩父では15センチになったとのことで、低温続きでほとんど消えていない。樹上の雪もそのままで、ときどきシャワーとなって落下する。初めて雪の山道を歩くという方は大喜びだった。雲がいくらもあるものの冬の陽光に雪がまぶしい。

峠までは約1時間、振り返ると冬枯れの樹間からどつしりとした

山容の武甲山が望めた。標高839mの峠には風化して顔がのつぺらぼうになった地蔵が佇む。峠でゆっくり食事をとり、名栗の名郷へ下った。雪道がところどころ凍結しているので時間がかかる。かつて「炭焼きの里」であった山中の集落はまったくの廃墟となっている。

右に鳥首峠からの道を合わせてしばらくで名郷に出た。ここは江戸時代から西川材と呼ばれた良材の集積地として知られたところである。また、明治維新2年前の慶応2年に発生した武州一揆蜂起の地としての歴史を持つ。

(大橋 晋)

AGC山岳地理クラブ

三宝山(一等三角点)と
三河川の源流を尋ねて

ある日の例会で「三冠王の山」の存在を知った。日本の中央分水嶺上の一等三角点本点で、かつ県境に位置する山だそう。この敬意を表したくなるような山は、全国で10座ほどだけだという。みごとに厳しい条件をクリアした埼玉県最高峰の三宝山(2488m)

を経て千曲川源流沿いを歩くというのが今回の探索山行である。小春日和の11月2日信濃川上へ向かう。地元の旅館に11名の参加者が集合し、明日の登山の話が弾む。

3日、毛木平から十文字峠まではなだらかなのぼりが続く。秋から初冬へと衣替えする山の景色には、なぜかいい感じのものを感じられてならない。大山を経ていよいよ三宝山へ、というところで風が強くなり比例するように気温もぐんぐん下がってくる。ついに「三冠王の山」の頂に到着、雪化粧で私たちを迎えてくれた。埼玉県と長野県の境界にあり、一等三角点を頂上に置き、日本中央分水嶺上に堂々と聳えるこの山は、隣の甲武信岳に勝るとも劣らない堂々とした山容である。まさに「三冠王の山」の称号にふさわしい威厳を感じる。三角標石の測定や、高度、方位などをコンパスやGPSを使ってそれぞれが調査する毎回お馴染みの作業を済ませ、風と寒さに震えながら頂を後にし甲武信岳に向かった。今夜の宿、甲武信小屋に到着して一息入れてから、笛吹川源流を往復。水源地の水飛沫が凍え、氷柱が印象的であった。

Climbing & Medicine · 18

急性高山病 (AMS) と二日酔い

中島 道郎

過日 (02/12/11)、NHKの『ためして合点』という番組で、二日酔いは脳浮腫である、という話をしていたが、それと急性高山病 (AMS) との関連について解説を加える。

AMSは、高所に到達した後6～9時間から72時間までの間に発症し、頭痛 (必発)・倦怠・食欲不振・悪心・嘔吐・脱力感・意欲低下などの症状を呈する。この症状の本態は、脳神経細胞の酸素不足から進展した軽度の脳浮腫とそれに基づく頭蓋内圧の亢進である。発症が高所に到着直後ではなく数時間後であるところに注目されたい。それに対し、急速に高所に到達した直後に覚える、倦怠感・呼吸困難感・ふらつき、眠気・生あくびなどの症状は、過換気症候群、つまり一種の脳貧血症状である。これは生体が酸素不足状態下に生理機能を保持しようとする正常な生理学的

反応 (高所反応) であって高山『病』ではない。しかしそれにも限界があり、限界を超えて生理機能が破綻した状態がAMSである。

生命の基礎単位である細胞は、細胞膜を介して、生命保持に必要なあるいは不要な物質を出し入れするが、その選択にはエネルギーを要し、ために酸素が消費される。酸素不足だとその機能が低下し、例えば余分な水が細胞内に貯留する。それが浮腫である。脳は酸素不足に一番敏感な臓器ですぐに浮腫を来たし、結果頭蓋内圧が亢進し、頭痛その他上記の症状を来たす。その軽症をAMSといい、重症を高所脳浮腫という。

一方アルコールは脳細胞の酸素の取り込み機能を妨害し、急性脳低酸素症を来たす毒物である。それが酩酊。もっともアルコール分子本来の化学作用も加わり、単なる脳低酸素症よりは修飾されてはいる。アルコール分解酵素の作用で、普通翌朝には症状は消失するが、飲酒量に分解酵素の働きが追いつかず、脳の低酸素状態が数時間も続くと、脳浮腫に進展する。これが二日酔い。二日酔いとAMSは症状が酷似し、かつ共にそれが翌朝になって出現する理由がこれで理解できたと思う。

それゆえ二日酔いの一番の治療薬は酸素で、デマンドバルブ付顔面密着型マスクを用いて純酸素をものの10分間も吸入すれば著効を呈すること請合いである。

4日、小屋の主人が「ニリン草の咲く頃もいいよ」と笑顔で送ってくれた。今回のもうひとつの目的は、千曲川の最初の一滴を訪ねるということだ。再び甲武信岳を経て水源地に向かう。日本最長の河川の最初の一滴の水の音は確実に鼓動していた。たった一滴が大きな河川を作り出す自然の力強さと神秘がヒシヒシと伝わってきた。水滴の音はしみついて離れなかった。昼前に毛木平到着。大きな自然と対峙しながら、一つ一つのテーマを学んだ充実感でいっぱいであつた。

(寺田 美代子)

エベレスト登頂50周年記念

南北両面からのエベレスト展望と空陸両方でのヒマラヤ越え
**エベレスト・カラパタル登頂トレッキングと
 チョモランマ・ベースキャンプ滞在28日間**

出発日～帰国日 4/12(土)～5/9(金)	発着地 東京・名古屋・大阪・福岡
---------------------------	---------------------

●カラパタル登頂 ●ヒマラヤ越えフライトでラザヘ
 ●チベット高原を走破してチョモランマB.C.へ。

¥698,000


アルパイン ツア サービス 株式会社

国土交通大臣登録旅行業第490号/出日本旅行業協会正会員 日本コンド協会員

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
 大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

JAC
支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

秋田支部

縫戸山・石の塔登山報告

10月27日(日)、県北部田代町の縫戸山(769^ミ)と、近くにある石の塔への秋山登山を行った。季節がら好天は期待しなかったが、朝から雨模様。それでも山好きの面々は、夜の明けきらない薄暗い土崎支所前の駐車場に1人2人と集まりだした。中には忘れられた人あり(連絡のミス、後に合流)だったが、一行18名5台の車に分乗して6時に支所前出発。

7時、道の駅「かみこあに」に着。8時10分登山口に着き8時30分登山開始。ずっと傘をさしての登り。低く雲がたれこめて視界は効かず、

紅葉は拝めず。9時35分縫戸山頂に着。雨も小降りになり、雲の切れ間から大館市の一部街並みを見ることができた。どんな山でも頂上から見る下界の見晴らしは素晴らしい。10時下山。下り始めて間もなく、対岸の尾根の紅葉を楽しませてもらう。まったく期待していなかったで、突然紅葉したような錯覚にとらわれ、今秋の一番心に残る美しい場面であった。

10時45分、陣内林道を通り石の塔へ移動。11時10分登山開始。相変わらず傘をさしてただ黙々と登る。12時山頂着。山頂の石の塔(巨岩)には度肝を抜かれ、自然の脅威に畏敬の念と驚きを感じた。想像を遙かに超える石の塔は、地元では昔から世界一大きい石で、ほら吹き大会を開いた場所と言い伝えられてきたように、小生もほらのひとつも吹きたい気持ちに駆られた。頂上には全員がやつと入れるほどの祠があり、雨をしのいで昼食をとれたことが救い。昼食が終わりかけた頃、北林、福田両名が約40分遅れで到着。

13時50分登山口に全員下山。ずっと傘をさしていたせいか、傘を持つ手が痺れきり、冷えきった身

体を一刻も早く暖めるべく「たしる温泉ユツプラ」に直行して疲れを癒し、15時40分今日の山行を思い描きながら帰路に着いた。

(浅野 茂春)

京都支部

「第10回 今西祭」開催

11月9、10日に故今西錦司先生(元JAC会長)を偲ぶ「今西祭」を山口県鹿野町と阿東町十種ヶ峰で行った。

9日14時に鹿野町のグリーンハイツ懇親会場に、北は北海道支部や岩手支部、南は東九州支部までの総勢66名が参集した。鹿野温泉でひと風呂浴びた後、17時から今西家ご長男、武奈太郎氏のご挨拶があり、続いて高木碕男前岐卓支部長による講演会「今西錦司先生との思い出」を拝聴。天性のリーダーである反面、機械オンチで頑固でもあった今西先生の人柄をユ一モアを交えて楽しく語られ、何度も笑いが起こった。会場には今西先生のご親族(長女麻葉^{まは}子氏、次男宇治日出^{うじひで}二郎未亡人、美津子氏)の姿もありにこやかに微笑んでおられた。



鹿野グリーンハイツに集った66名

さらに地元の「ふく」調理人青木繁雄さんの講演も行われ、山口では「ふぐ」を「福を呼ぶ」に因んで「ふく」と呼ぶことや地元徳山市がふく延縄漁発祥の地であることなどが紹介された。

18時半からは会場を移しての懇親会。斎藤惇生前会長の発声で杯をあげ、徳山ふくのフルコースに舌鼓をうち、在りし日の今西先生との思い出を酒の肴に、会は盛り上がった。広島支部の吉見良一さ

んからは西中国山地を今西先生とご一緒した思い出が紹介され、数十年ぶりの再会を語りあう場もあった。そして今西先生のわがまま(失礼!)だが憎めないところ、あめとむちを上手く使い分けられ周囲の人に慕われるところなど、話題はつきなかつた。二次会も大部屋に約30名が集い、京都や岐阜の面々のお座敷芸も出て当日貸切のハイツは不夜城と化した。

今西祭は1992年の先生没後、翌年10月31日岐阜支部による第1回が高賀山で行われ、以後京都、新潟、長野、奈良、大分・宮崎、富山、静岡などで回を重ね、今回10回目までと区切りをつけ最終回となった。そこで記念登山は10座目となることから語呂合わせで「十種ヶ峰」とした。

今西先生は山口県の山を26座登頂され、十種ヶ峰も1979年10月6日に登られている。長門富士とも称される一等三角点988・8の秀峰は例年11月上旬なら秋の装いだ、11月7日の大寒波により山麓はスキー場が急遽営業できるほどの積雪に恵まれ、10日の記念登山日には事務局は冬タイヤ付きの車両のみによる配車に苦慮

した。

結局、体力と雪山装備のある約7割の方のみ登頂し、それ以外の方は徳佐盆地から雪化粧した十種ヶ峰を望む結果となった。そして十種ヶ峰の山麓5合目付近に全員で集合しての雪中昼食宴会(?)、今西流「ヤッホー三唱」の後全員下山し、西中国の低山での思わぬ雪山気分を楽しんで、14時頃宿に帰着、解散した。

故今西先生を慕って参集する全国の岳人の集いは今回で終了するが、来年からは京都支部の有志により「今西錦司レリーフを守る会」を立ち上げて、毎年6月に開催予定である。(林 一夫)

石川支部

「深田久弥 山の文化館」開館式典

昨年12月23日「深田久弥 山の文化館」が深田さんの故郷、石川県加賀市の実家のすぐ近くにオープンした。

門をくぐると樹齢四、五百年の銀杏や椎の太木に守られるように、旧織機工場を改築したという古い木造ながらどこかモダンを感じさ

せる建物がある。古いものを継ぎながら常に新しいものに目を向けていたいかにも深田さんらしさを連想させてくれる。

当日は好天で、それまでの積雪もほとんど消え、この季節の雪国には珍しいオープン日和であった。開館記念式典は本会会員、大幸甚加賀市長の式辞、深田森太郎氏らの来賓祝辞と続き、文化会館長高田宏氏の挨拶、テープカットがあり、参会者の会館内覧となった。

本館1階に事務室と図書室、2階には囲炉裏端様に切り込みをしつらえた広い談話室。また本館から回廊でつながった石蔵があり、深田さんの原稿やピッケルなどの山道具が並ぶ展示室となっている。その後、2階の談話室で深田さん作詞の「ヒュッテの夜」などの混声合唱演奏に続き、南修氏(白山連峰合衆国大統領)の「白山麓に残る歴史的遺産の活用について」と題した講演が行われた。

高田館長の挨拶でもいみじくも語られたように、文化館の完成度はまだ20%くらいかもしれない。しかし展示を単に見て帰るのではなく、図書室や談話室を中心に多くの人の参加によって常に声の満

ちる場となればすばらしく充実をとげること期待している。

2003年は深田久弥誕生100周年にあたり、各種の記念事業が展開されるが、関係者のお骨折りに多謝すると同時に「日本人はたいていふるさとの山を持っている」の書き出しで始まる深田さんの精神を私たちは受け継いで行きたいし、当事者にならねばと考えている。

会員の皆様に、何かの折りに一度足をのびされる価値は十分あると、来館をおすすめします。

(津田 文夫)

自分の想いを、「本」にしませんか。

— 山岳書をつくるプロが、発刊のお手伝いをします —

山行記録集のほか、紀行・随筆・歌集・句集・詩集・写真集・記念誌などを、お望みの形や様式でつくることができます。まずは、お気軽にご相談ください。

詳しい資料をお送りします。お問い合わせ・お申し込みは—

Tel. 075-604-3120 Fax. 075-604-3123
E-mail takeuchi@fd3.co.jp

編集プロダクション

TAKEUCHI 制作室
GRAPHIC ARTS & EDITORIAL

〒612-8427 京都市伏見区竹田真木町55番地 F.D. 3 内

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

短歌

アンナプルナをめぐる

伊佐 九三四郎

プーンヒル

人類初八千米峰に立つフランス隊『処女峰アンナプルナ』の名著想ふ日

世界の屋根太古は海の底にあり悠
久の風吹き抜ける山

グレパニの村

村童の飛ぶがごとくに下りくる岩
の坂道小天狗の群れ

ガンドルンのテント場

火を囲み歌ひ踊れるポーターの頭
上に高き満月の青

ふたつの特別企画展 對山館と百瀬慎太郎展 山岳画家 茨木猪之吉展

大森 久雄

安曇野がもしろい。昨春秋から初冬、大町市の市立山岳博物館では「對山館と百瀬慎太郎展」が、すぐそばの池田町の町立美術館では「山岳画家 茨木猪之吉展」が開かれた。どちらもユニークな企画で、時間をやりくり、終了間際に東京からJR利用の日帰りで見に行ってきた。結果は大満足。

對山館の名は先人の山の文章を読めばおなじみの旅舎。古くは「やまちょう」といつて、ウェストンの本にも出てくるし、北アルプス開拓期に活躍した先人はみんなこ

の旅舎の世話になっている。3月には本会集會室で、同展の報告が行われる予定だから、詳しい内容はいづれ報告されるだろうが、精密な同館の復元模型があり、豊富な記録写真や家具、調度なども展示されて、往年の對山館のありさまが十分にしのべた。かつてはどの山域にも登山と密接に結びついていた旅舎があつたが、對山館はいわばその代表格だろう。

なかで興味をひかれたのは雑記帳。展示ケースの中に開かれていた部分は、なんと大正4年夏、毛勝山から劍岳北方稜線をへて赤牛山、烏帽子岳への大縦走を終えて大町のこの旅舎にたどり着いた小暮理太郎の毛筆書きの記述。こんなものが保存されていたのだ。

同館主人の百瀬慎太郎は、石川欣一との親交や「山を想えば人恋し……」の名唱で知られ、大沢小屋や針ノ木小屋など、周辺の開拓に大きな足跡を残した。

池田町は5万分の1地図の図幅名・信濃池田でおなじみだが、町立美術館はまずそのロケーションのよさと建物の立派さにびっくり。茨木猪之吉は日本山岳協会創立メンバーのひとり。昭和19年秋、

穂高岳白出沢で行方不明になった。その作品は戦前の山の本でよく目にするし、スケッチ風の墨絵は飄飄とした独特の味わいを持つ。展示された油絵は約100点。日本山岳協会所蔵とされるものがおよそ40点だが、なかにはキズ、汚れ、かびなど痛ましい状態のものが多し。どんな状態で保管されていたのだろうか。

これだけの作品を一度に見られる機会は今後もあるかどうか。よく知られていなかった作品を大量に見られたのは収穫だが、個人的には油絵よりも淡彩の水墨画的スケッチのほうに魅力があつた。全容を伝える図録(700円)ができています。

余談だが、昨年は、小島烏水と岡野金次郎が槍ヶ岳に登り、それが縁でウェストンとの交友が始まって日本山岳会の誕生につながった明治35(1902)年から100年だった。そのような年に信濃の一角で先人の跡を偲ぶ企画展が開かれたのは意義深い。帰りに「田淵行男の世界」展が開かれていた豊科にも寄りたかったが、時間切れになってしまった。それでも安曇野は元気がいい。

「石の塔」への不思議紀行

佐藤 栄治

小雨の県境稜線は、巨石へのロマンを求める一行の足どりを軽くした。広葉樹の落葉を踏む前方に、やがて杉の太木が見え、忽然と「石の塔」が現れた。田代町と大鰐町の県境の木立に囲まれた稜線上にある巨大石。高さ約24^{メートル}、周囲約74^{メートル}。想像を超える巨大石に圧倒された。なぜこのとてつもない巨石が山稜にあるのか不思議だ。この地域には「石の塔を見ねで、大ぎだご言うな」ということわざがあるが、「万国ホラ吹き大会」がこの巨石にちなんで毎年開かれていると、新聞記事で読んだことがある。なるほど、と納得した。

「石の塔」は江戸時代に天から降ってきた、と言い伝えられている。巨大石が天から降りた神と信じる巨石信仰が、仏教の薬師如来が降臨した石の塔薬師と、神仏が混濁して厚く信仰されてきた。

石の塔の下部に、巨石に守られるように鮮やかな朱色の小さな薬師堂があった。そのご神体は石の塔そのもので、巨大石の霊力が人

人の病氣や災いを払う薬師神として信仰されてきた。我々は、薬師堂の前にある木造の拝殿で昼食をとらせてもらった。菅江真澄はこの地を訪れた時に「石の姿は手のひらをつと立てしたようで、振り仰ぐと雲が沸きおこるほど高くそびえている」と紀行文に記している。

山頂にどうしてこの巨石が屹立しているのか。不思議である。現代科学、地理学の専門家からはすぐ明解な答えが返ってくる間いであるが、山奥の県境にそびえる信仰の巨石「石の塔」にまつわる不思議な話として、ミステリーの世界の登拝を楽しんでほしいと思う。(10月27日、秋田支部秋山登山に参加して)

富士山頂で健康診断

北山 孝允

これは昭和43年に、労働衛生学調査の原点は作業現場にあるとの考えで実現したものである。当時、富士山頂における気象庁職員は20日交替で山頂勤務に就いていた。

9月初め、筆者以下スタッフ4

名で健康診断の機材をもってブルドーザーで御殿場から山頂へ向かった。言われた通りできるだけ厚着で行ったが、天候の急変があったらそんな服装ではだめと、職員用の防寒具に身を固め、出発した。幸い悪天候にあわず約5時間で山頂着。筆者は観測所までブルドーザーから降りなかったが、山頂直前で降りて歩いた若手3人は高山病にかかり、頭痛、食欲不振に悩まされた。当日、夕食をおいしくいただいたのは筆者だけであつた。翌朝ご来光を拝みたいと、5時に起こしてほしい旨職員にお願いして2段ベッドの床に付いた。しかし湿気を吸って石のように重くなった布団と、空気が薄いため深く吸う自分の呼吸が意識されてよく眠れず、4時前に床を離れた。食堂に行くとき皆起きていた。まだご来光には時間があつたが、外へ出てみると星が実にきれいである。山頂にはご来光を拝むために登ってきた登山者が数十人いた。美しいご来光を拝み雲海に影を落とす逆さ富士を見て、観測所で朝食を取り、健康診断に取りかかった。健康診断の結果特に気づいたことは血色素の増加(全血比重によ

る)と血圧の上昇だった。いずれも酸素不足に対する生体の適応現象である。これは、聞き取り調査によるものであるが、職員は山頂へ来て2、3日は、碁や将棋をしたりするが、その後は頭を使うことが煩わしくなり、平地では几帳面な人が髭を剃るのも面倒になるとのことだった。また、お酒に弱くなり、わずかの量で酔ってしまふそう。帰りは歩いて下山した。

この健康診断の報告書に山頂の寝具は羽根布団にするべきであるとしたが、このアドバイスが生かされたかどうかは知らない。

山の本の古書店

山と探検に関する本の目録販売。

目録ご希望の方お申し込み下さい。



晴山書房

東京都中野区上鷲宮4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540

海外の山

ブクレエフ基金
—ある異文化交流の試み—

江本 嘉伸



エヴェレストBCでのブクレエフ
Photo by: www.HimalayaClimb.com Daniel Mazur

「カザフ独壇場」。2月はじめ、青森での冬期アジア大会を伝える新聞に、こんな見出しが踊った。スケート、ジャンプなど日本勢が席捲している競技の中で「スキー距離」だけは、カザフスタンが金メダルを独占しそうだ、という。登山に関しても、実は強力なクライマーが育っている国だ。

アナトリイ・ブクレエフ記念基金の2003年度授賞対象者が1月

末、発表された。アメリカのステイプ・ハウスがカザフスタンでのスビード・クライミング・コンテストに、アルマトイのワレトヴァ・エレナ・エブゲーニエブナが、アメリカでのクライミングに、それぞれ派遣される、ということだ。

また、メリス・コーディー以下4人のアメリカ女性も夏の天山キャンプへの参加、秀峰、ハン・テングリへの登頂を招待された。最近カムチャッカへのスキー探検を実行したグループで、語学に達者なメンバーだ。

カザフの前の首都（現在はアスタナ）、アルマトイの郊外にレリーフがある。1999年に建てられたもので、天山山脈やヒマラヤで活躍した登山家たちの名前が刻まれている。

そのひとつに、アナトリイ・ブクレエフの名が刻まれている。96年5月のエヴェレストでの遭難の際、ガイドにあるまじき独自の行動をとった、と批判され、一方ではその献身的な救出活動が高く評価されたカザフスタン出身のロシア人登山家。1997年12月25日、アンナプルナで雪崩に遭い死亡した。38歳だった。それぞれリーダーだった、ロブ・ホール、スコット・フィッシャーというベテラン・ガイド自身の死、サ

ウス・コルまで生還しながら、力尽きた日本の女性登山家、難波康子、難波とともにサウス・コルに放置されながら、奇跡的に自力でキャンプに戻ることに成功したオーストラリア人、ベック・ウェザーズの生還など、96年5月にエヴェレストで起きたふたつの商業公募登山隊の遭難事故は、衝撃的で、いまなお記憶に新しい。

ホール隊のメンバーで作家のジョン・クラカワの『空へ』（原題 Into Thin Air）が迫真の真実を伝えるものとして、世界的なベストセラーとなったが、もうひとつの真実を、と別の本も、出版された。フィッシャー隊のガイドとして現場に居合わせたブクレエフ自身が、ライター、映像作家であるG・ウェストン・デウォルトとの共著のかたちで書いた『デス・ゾーン8848M・エヴェレスト大量遭難の真実』（原題 The Climb）という本である。

今さらなので詳述しないが、クラカワとはまったく別な視点に立つ貴重な証言録だった。ブクレエフは、ソ連の崩壊直前の1988年から1997年まで、18回も8000メートル峰に無酸素で登頂しているスーパー・クライマーである。そのことは、

彼自身が、政治体制の移行を体感しつつ高峰登山を続けた人間であることを物語っている。彼を愛した人々が死後「ブクレエフ基金」を創設したのは、「クライミングを通じての異文化交流」とでもいうべき発想を、生前のブクレエフが持っていたからだ。

プロ・ガイドとして、アメリカをベースに新しい暮らしをはじめたブクレエフは、アメリカはじめ西側諸国の登山家たちの持つ「自由」の空気を喜びながらも、1991年まで続いたソ連のアルピニズム教本、そのトレーニング・システムを高く評価していた（これは、他の多くの旧ソ連人アルピニストが同意するところだ）。双方の優れた要素、いいものを融合させることはできないかと、ブクレエフはアメリカの友人たちに語っていた。

基金の運営は、個人や企業の寄付でもにまかなわれている。国際的な協力も呼びかけられ、ブクレエフの名入りのチタン製アイス・アックスが基金のために、限定販売されるところだ。

忘れてはいけないものがある。カザフスタンの登り手たちはそう言っているようだ。

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

写真集『世界の山』

風見武秀・著

著者の風見武秀さんは、言うまでもなく日本の山岳写真界の第一人者、また本会の名誉会員でもある。2002年、88歳の米寿を迎え日本山岳写真協会の会長を務めるかたわら、いまでも世界の山岳風景を撮り続けている現役の写真作家である。

最初に海外の山にカメラを向けたのは1958年、作家の深田久弥さんらと同行したネパールヒマラヤ。以来カラコルム、チベット、中国、ヨーロッパ・アルプス、カナディアンロッキー、アンデスなど撮り歩くこと約半世紀に及ぶ。

写真集は、名だたる秀峰64座を収録、それぞれの作品は蒼穹に高く、鋭く、厳しく、そして美しい。まず真紅の花を全景に配したアンデスの鋭峰パイネ・チョコを扉に、氷河上に屹立するK2、蒼い妖精のようなチョモランマの水塔群、燃えるように赤く染まったアイガルの岩壁など、いずれも歳を感じさせない迫力ある作品である。

ともあれ世界の山に魅せられ「撮りたいものは撮る」という信条をもとに旺盛な写欲で撮り続けてきた。本書から改めて風見さんのバイタリティーと映像に残してきた足跡の偉大さを知らされる。

(羽田 栄治)
2002年9月 東京新聞出版局発行 A4判 96頁 3500円

『回想の谷川岳』

安川茂雄・著

1956年現代社刊、1959年に内容を一部変えて朋文堂から再刊された後、長らく絶版になっていた著作が甦った。

安川茂雄の名は『日本アルプス山人伝』『近代日本登山史』ほか

数多くの著作で知られるが、その中で、最も好ましく、上位の位置を占めるのが本書である。

著者は谷川岳に青春のすべてを投入したといってもよいほどで、その成果は労作『谷川岳研究』(1954年刊、著者名は長越茂雄)にまとめられている。今回、現代社版を底本にした表記の本をおよそ40年ぶりに読み返してみても、やはりこれは日本の山岳図書の秀作のひとつという印象を新たにした。

戦中・戦後の狂乱怒涛の時代に谷川岳を核に山にひたむきにうちこんでいた青年のみずみずしく熱い想いが全篇にみなぎり、新鮮さを失っていない。そこに描かれる世界は、たとえば「ひとり息子の山―谷川岳のある単独行」「秋山回想」などに代表されるように上質である。

近年山を始めた高年齢の方にも、また特に若い人にもすすめたいが、技術も用具も当時とは違い、岩場の難易度や登る人の気質も変わってきているという現代に、この秀作は、どのように受け取られるのだろうか。

前二著と同様、詩人・尾崎喜八の、著者の人柄と仕事を巧みに愛

情をもつて表現した序文がある。

(大森 久雄)

2002年8月 河出書房新社
発行 221頁 1600円

東京外国語大学山岳会・著

『記録 若き日の山』

外語山岳部の五〇年

美しい装丁の本である。表紙はシックな褐青色。表題の「若き日の山」は、初代山岳部長の串田孫一氏の名著『若き日の山』より拝借したと記されている。串田氏の淡彩画や三宅修氏の写真、大谷一



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここが得意です。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。



株式会社 アトラストレック

(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
 大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
 名古屋/〒464-0807 名古屋千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

良氏の版画、青柳健氏の詩が本書を飾っている。「第一部、五十年」には外語大山岳部の誕生と発展についてや、串田氏へのインタビュー記事がある。

「第二部、若き日の山」には、57年の積雪期南ア金山縦走や57年から63年の間に行われた滝谷での数多くの登攀などが記されていて、中でもクラック尾根の冬季初登攀、P1フランケの初登攀と積雪期初登攀が輝いている。海外では、64年のポリビア・アンデス遠征、68年のモンゴル・ハルヒラー峰遠征がある。

「第三部、想う」には多くの会員の山行にまつわる随想が詩情豊かに記されている。「第四部、それぞれの地平線」には会員の海外の山のトレッキングや登山記があり、向一陽氏のアタカマ高地探検や奥アマゾン探検の内輪話なども記されている。

「第五部、東京外語大学山岳部・山岳会年表」には100ページにわたりその歴史が詳述されている。

過激な登攀、未踏地への遠征、詩情豊かな随筆が織りなす、山岳交響曲が聴こえるような本書は、外語大の面目躍如といふことができる。

(田村 俊介)

2002年 約380頁 領価500
0円 特装限定本もある 問合せは寺
本義明まで TEL&FAX 045・363・
8198

図書受入報告 (2002年11~12月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
船木上総	凍る体：低体温症の恐怖	204pp/20cm	山と溪谷社	2002	著者寄贈
栗田和彦	雪と遊ぶスノーシュー：テクニク&フィールドガイド	159pp/22cm	山と溪谷社	2002	出版社寄贈
水谷章人	アルプス：水谷章人写真集	95pp/22cm	山と溪谷社	2002	出版社寄贈
坂倉登喜子	エーデルワイスの詩	262pp/20cm	山と溪谷社	2002	出版社寄贈
坂口貞男	熊野 山ごよみ	222pp/20cm	角川春樹事務所	2002	出版社寄贈
西丸震哉	食物崩壊：出揃った滅亡のシナリオ	190pp/20cm	講談社	2002	著者寄贈
石川理夫	山歩きで楽しむ本物の温泉	223pp/22cm	アテネ書房	2002	出版社寄贈
日本労働者山岳連盟海外委員会(編)	海外トレッキング入門：実路ガイド25コース	253pp/21cm	大月書店	2002	出版社寄贈
山の本編集部(編)	人はなぜ山へ	364pp/19cm	白山書房	2002	出版社寄贈
向一陽(編)	記録 若き日の山：外語山岳部の50年	350pp/23cm	東京外国語大学山岳会	2002	発行者寄贈
日本山岳会バドマナブ登山隊(編)	日印合同東カラコルム踏査・バドマナブ登山隊2002 報告書	22pp/30cm	日本山岳会	2002	当会発行
金子昌彦・廣澤和嘉	登山誌：南アルプスを含む静岡市の山山	357pp/21cm	金子・廣澤(私家版)	2002	著者寄贈
加賀要子	歌集 山の声	297pp/20cm	短歌新聞社	2002	著者寄贈
及川迪靖	和佐羅比山『天測点』『子午線標』見分の記	10pp/30cm	及川迪靖(私家版)	2002	著者寄贈
遠藤甲太	登山史の森へ	398pp/20cm	平凡社	2002	出版社寄贈
室賀輝男・他(編)	山なかま：長岡ハイキングクラブ創立50周年記念誌	273pp/26cm	長岡ハイキングクラブ	2002	発行者寄贈
森山哲哉(編)	アンデスへの道：2000・2001ペルーアンデス遠征隊報告	150pp/26cm	ぶなの会	2001	発行者寄贈
ぶなの会(編)	北天の星：島崎聡追悼集	159pp/26cm	ぶなの会	2002	発行者寄贈
信州大学登山隊(編)	遥かなり、ガネッシュヒマールⅡ峰	133pp/26cm	信州大学山岳会	2002	発行者寄贈
三浦敬三	98歳、元気の秘密	188pp/19cm	祥伝社	2002	JAC岩手支部
三浦敬三	99歳、モンブラン大滑降に挑む	303pp/20cm	草思社	2002	JAC岩手支部
JAC科学委員会(編)	フォーラム「中高年登山者の山での食事を考える」	23pp/30cm	日本山岳会科学委員会	2002	発行者寄贈
東京農業大学山岳会(編)	2000年度冬山合宿遭難事故報告書：北アルプス船窪岳	174pp/26cm	東京農業大学山岳会	2002	発行者寄贈
長岩嘉悦(編)	仁者樂山：秋田県山岳連盟創立50周年記念誌	204pp/26cm	秋田県山岳連盟	2002	発行者寄贈
JAC岩手支部(編)	黄河源流域探検報告書(2001年7月24日~8月19日)	44pp/26cm	JAC岩手支部	2002	発行者寄贈
清水長正(編)	百名山の自然学：西日本編	126pp/21cm	古今書院	2002	出版社寄贈
清水長正(編)	百名山の自然学：東日本編	126pp/21cm	古今書院	2002	出版社寄贈
山崎浩希	信州山岳日帰り紀行	333pp/19cm	龍鳳書房	1996	著者寄贈
山崎浩希	信州山岳日帰り紀行(Ⅱ)	278pp/19cm	龍鳳書房	1999	著者寄贈
Peter Grauss et al.	BERG 2003 (Alpenvereins Jahrbuch Band 127)	320pp/27cm	DAV, OAV, AVS	2002	発行者寄贈

会務報告

11月理事会

日時 12月11日(水)18時30分～21時10分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】大塚会長、長尾、村井、芳賀各副会長、西村、坂井、今村、高原、鳥居、中村、藤本、高遠、朴元、黒川、鈴木、大野、宮下、小川各理事、古市、内田各監事、平林、宇田川、宮崎、鰐坂各常任評議員

【委任】松原、河西各理事

【審議事項】

1 創立100周年記念事業の予算と募金方法について (その2)

村井副会長

標記事業予算として総額8500万円とする。うち4500万円を文化事業、4000万円を登山に予定する。収入は会員寄付により4000～4500万円、長期準備積立金より4000～4500万円とする。募金方法は全会員に対し平成15年より3年間、各年30000円の寄付願いをする。

(以上は9月24日の財務委員会提案にもとづき、10月理事会で検討

した案による)

(承認)

2 東海支部、関西支部の海外登山2隊の創立100周年記念事業としての計画承認について 西村

11月理事会に提案された次の2つの海外登山計画について、平成14年12月11日開催の創立100周年記念事業準備委員会において計画承認された。

①東海支部「第9次インドヒマラヤ登山隊2005(6000峰未踏峰2座)」

②関西支部「チベット トウイカニリ登山隊2004」 (承認)

西村

3 長期改善計画(案)について
長期改善計画策定プロジェクト(リーダー西村)でまとめた「長期改善計画(案)」(資料あり)が提案され検討した。様々な角度から意見が出され継続審議となった。主な意見を以下に記す。

●入会方法として英国山岳会では推薦者制度の他に、自己申告(自分をアピールする)がある。

●もつと当会を世の中にアピールすべきだ。例えば秩父宮記念山岳賞など。

●当会のパブリシティが少ない。プレスリリースを頻繁に。

●創立100周年記念事業の「百年史」編集で日本人の海外登山の全記録をまとめている。会員のためになる資料のまとめ、問い合せ対応、公開はコーディネーター役を週3日でもアルバイトに雇うことも必要。また会長、副会長と連携を取れる人材であってほしい。

●支部設立のための人数が20名は少ない。40名は必要。

●首都圏支部だが、本部に影響の少ない範囲で、例えば群馬、千葉等で支部設立はどうか。

●入会資格の判断は各支部に任せればよい。

●集会、企画行事等、責任は当会でとるが、労働はアウトソーシングしないとだめ。

●パイオニアワークと大衆化の二極化があつてよい。

●アメリカ山岳会は門戸を広げすぎたのか、会員名簿の発行が中止された。あまりにも変動が多すぎるらしい。

●会員を増やす目的は何なのか、自然としない、財政のためだと本末転倒でないか。

●会員は裾野を広くしないと、山は高くなならない。上がるための道筋をつけることが大切。

「山の本」春の新刊発売!!

全世界紀行—民族と歴史、そして冒険

南里章二 著 (9364) A5判 480頁 本体2,700円
シルクロード、ヒマラヤの踏査。コンゴ、アマゾン川下り。サハラ砂漠縦横断など、全世界独立国192カ国を旅して。

鈴鹿の山を歩く

草川啓三 著 四六判 330頁 予価2,600円(3月刊)
鈴鹿全山約80のプロフィールとおすすめアドバンスコース20を紹介。カラーフォトエッセイなど、盛沢山な内容。

●好評発売中

四国の山を歩く

尾野益大 著 四六判 300頁 本体1,900円
四国の山々50余座を、史跡、植物、景観など山の個性に光をあてて案内する四国初の本格的ガイド紀行。

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

【付】カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入 385ページ B全判地図13葉

宮森常雄(秩父宮記念山岳賞受賞)・雁部貞夫 共著

◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

● 当会でないといけないプロジェクトを持つことだ。ナムチェバルワが最後ではないか。

● 子供との登山、障害者との登山、自然保護は大切。

● 事業委員会より事業部とした方が委員会の殻を破るのに適している。社団法人として子会社を立ち上げてはどうか。 (継続審議)

【報告事項】

1 資料等の使用、名義後援等願いについて 西村

以下の依頼に対し許可した。

① アルプスガイドフェア実行委員会 (上条岳人委員長) より「2003アルプスガイドフェア」(3月15～21日、新宿御苑インフォメーションセンターで開催)の登山教室への当会員の講師派遣および名義後援(資料あり)。

③ 東京農業大学山岳会(山下康成会長)より、故織内信彦名誉会員の遺稿集「もうひとつの快晴の山」への「山」500号、「山岳」第80、89年の記事の転載依頼。

2 平成15年度SSFスポーツエイド(笹川スポーツ財団)の募集について 西村

標記につき、別添資料により案内があった。

3 各委員会報告

総務委員会・インターネット小委員会 西村、高原

● 年次晩餐会の出席者は528名で、昨年より若干増加した。

● 当会ホームページへのアクセス件数の報告があった(月平均約3500件で、昨年より増えている。例えば10月では昨年3336件、今年は5250件だった)。曜日では、土、日はわりと少ない。

財務委員会 村井副会長

● 11月末までの会計報告および収支は順調に推移している旨の報告があった(資料あり)。

● チョー・オユー女子登山隊の会計報告は現在まとめの最中。

● 来年度の各委員会に対し予算額要求の案内があった(平成15年1月31日までに財務委員会に提出)。

● 故織内信彦名誉会員のご遺族より当会に対し50万円の寄付があった。

会報編集委員会 今村

12月号は大蔵喜福会員の「これからの山岳会一考」がトップ記事。

海外委員会 中村

● アメリカカンパインジャーナル前編集長が編集した「Alpinist 1」の紹介があった。

● パキスタンの登山料金の案内があった(半額になった)。

● チベットのアルプスの山々のカラー写真紹介があった。

自然保護委員会 西村(河西代行)

「高尾の森」8号発刊の案内があった。

学生部指導委員会 鳥居

学生部主催の第39回マラソン大会が皇居外苑で11月17日開催され、17大学24チームが参加した(資料あり)。

山研運営委員会 小川

平成14年度の山研利用状況の報告が別添資料によりあった。合計840名の利用だった(昨年度は837名)。

会員異動

井出 賢三(6395)02・5・1

退会

伊藤 信夫(7381)

溝井 力男(9255) 福島

田辺 彰(10333) 関西

山田 潤(11081)

山田多美枝(11082)

小暮 真望(12208)

川越みどり(12406)

入野 忠芳(13428) 広島

齋藤 茂(13538) 宮城
終身会員

松井 芳隆(5201)

ルーム日誌

12月 総務委員会 会報編集委員

2日

3日 アルパインスケッチクラブ

4日 フォトビデオクラブ

5日 山岳地理クラブ

6日 01同期会

9日 アルパインスキークラブ

10日 二火会 スケッチクラブ

11日 つくも会 休山会

12日 学生部 山の自然学研究会

16日 資料委員会 集会委員会

17日 インターネット小委員会

緑爽会 00同期会

18日 山研運営委員会 三水会

19日 科学委員会 97同期会 98

同期会 アルパインスキー

クラブ

20日 長期計画策定プロジェクト

21日 SUN燦会

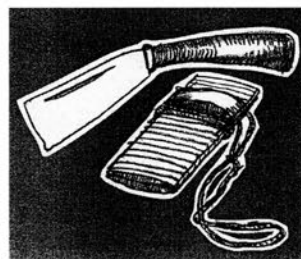
24日 自然保護委員会 01同期会

95同期会

25日 図書委員会

12月来室者550人

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆講演会「ゴム貼り靴底の剥離問題とメーカーの対応」科学委員会

プラスチックススキー靴の突然破壊よりも、より煩雑に登山者を悩ませている標記の問題につき、その解消に向けたメーカーの現在の対応策について伺います。

講師 花香 昌男氏(シリオ株式会社社長)

日時 3月20日(木)18時30分より
場所 日本山岳会集会所

※事前の申込みは必要ありません。

◆第31回「山岳史懇談会」

図書委員会

昨年10月12月、大町市立山岳博物館で開催され好評を博した「対山館と百瀬慎太郎」と題する企画展。これを機に同企画を推進した同館学芸員峯村氏を講師にお迎えして、日本登山史に輝かしい光を残した「岳の街」大町対山館の

時代“を偲び、語り合いたいと思います。

日時 3月25日(火)18時30分より

場所 日本山岳会集会所

主題 対山館と百瀬慎太郎

講師 峯村隆氏

◆第3回高尾の森「植樹祭」

自然保護委員会

最初の年に植えた木がもう背丈ほどになりました。ご家族ご友人誘い合わせてご参加ください。

日時 4月13日(日)

集合 裏高尾小下沢旧八王子市野

営場10時

持物 作業手袋 弁当

参加費 一般500円、学生200円(子供、高尾の森づくりの会会員は無料)

募集 300名

申込 氏名、住所、電話、FAX、メールアドレスを記入して

山川陽一宛(FAX 042-374-7165 メール

JACikaonomori@aol.com)

◆恒例の歩くスキー

山ゲラの会

皆様の参加をお待ちしています。

期日 4月11(金)13日(日)

場所 銀山平・奥只見丸山(マイ

クロパス使用)

宿泊 新潟県六日町温泉・国際ユ

ース・ホステル

費用 2万円(2泊6食・懇親会

集合 宿泊地(解散も)

申込み 3月10日までに会員番号、

住所、氏名、年齢、レンタ

ルスキー要・否、交通手段

を明記の上郵送で山本良子

宛(〒949-6425

新潟県南魚沼郡塩沢町姥島

新田795-440)

*ボーゲン程度でできる方に限る。

*送迎の車については申込者に別

途お知らせします。

◆春の親睦ハイイク

「沼津アルプス」 97同期会

桜と富士・箱根・天城そして駿

河湾の眺望を楽しみます。同期以

外の参加もお待ちしております。

期日 4月5日(土)

集合 東海道線沼津駅9時30分

行程 沼津駅(バス)多比一太平

山―鷲頭山―徳倉山―横山

峠(タクシー)―沼津港(懇

親会) (歩行約3時間)

申込み 3月末までにメールかハ

ガキでメールボックスへ

問合せ 池谷健(TEL 042-36

6-2485 Eメール

ken1009@dt.dion.ne.jp)

◆2003アルプスガイドフェア

期日 3月15(土)21日(金)(7日休

時間 9時16時30分

場所 新宿御苑インフォメーショ

ンセンター

展示 自然保護・環境保全・遭難

防止などの解説パネル、山

岳・高原・温泉のポスター、

案内図、写真、ガイドマッ

プ、トレッキング用品など

ガイド 各山域、高原、温泉のガ

イドが常駐、最新情報案内

行事 午前・登山教室、午後・ス

ライド紹介、解説

問合せ 安曇村観光協会(TEL 02

63-94-2221)

■訂正

12月(692)号12ペー

ジ4段、最終行、直径約35センチの誤りでした。お詫びして訂正

します。

日本山岳会会報 山 693号

2003年(平成15年)2月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 大塚博美

編集人 今村千秋

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社